

## 唐汝詢とその『唐詩解』について

陳, 禕璇  
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/4763190>

---

出版情報 : 中国文学論集. 50, pp.149-161, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# 唐汝詢とその『唐詩解』について

陳 禕 璇

明代には数多の唐詩選集が編纂された。唐汝詢の『唐詩解』はその中において特別な存在である。それは『唐詩解』が様々な意味で貴重な詩集であることのみならず、作者の唐汝詢が盲人にして卓越した文学者だからである。しかしながら、日中における唐汝詢及び『唐詩解』に関する研究は未だ非常に少ない。

本稿は、研究の第一歩として、その伝記資料と著作を中心として、彼の生平及び生卒年を推定するとともに、『唐詩解』の出版状況について、判明した事項を報告するものである。

## 一、唐汝詢の伝記資料とその生平

唐汝詢は、両眼の光を失ったため出仕できず、全生涯を一般庶民として過ごした。それゆえ『明史』などの正史には記述が無く、生平についてもなお十分に解明されていない。

従来、唐汝詢の生涯と事績の記録については清代初期の周亮工『書影』に収録される「唐汝詢伝」が最も参照されてきた。河北大学の王振漢氏は「これが唐汝詢を詳しく紹介した唯一の資料である。他に『松江府志』、『奉賢県志』、『虞初新編』、『国朝耆献類徵初編』などにも記述がみられるが、いずれも『書影』をそのまま転載したものにすぎない。」と述べている。今般、周亮工よりも早期かつ詳細な伝記資料を発見した。以下これを引用し、各文の後に梗概を附す。

唐汝詢とその『唐詩解』について

吾郷楊修齡侍御嘗告我曰、華亭有唐汝詢字仲言者、五歲而瞽、今五十餘矣。自五歲後至今、聞人誦輒記、記又能解。又能以其所記且解者、自出而爲詩文。又註古之爲詩文者、各不下數十萬言。計五歲以後、所記且解者、皆人之口所授於其耳、其耳所授於其心者之積也。五歲以後所出爲詩文及註古之爲詩文者、皆其心所授於其口、其口所授於人之耳與手者之積也。其類既多、其體既備、其立意又皆以該且核為主。既已剖析疑義、欣賞奇文、至字之音如東冬、清青之屬、問其形、不識如故。予聞而異之。

居二年、予過白門、適晤其人。質之修齡先生所言、皆是。後仲言歸華亭、數月、復晤予、誦予『集前園』詩「霜後芙蓉猶有露、冬前楊柳暫爲煙」之句。予凄然爲誦其全什、察其審聽哀問之狀、爲憫默心酸久之。何者。凡仲言所爲、終其身寄於所不可必者也。數十年中、以其心聽命於其耳、以其耳聽命於人之口。人之口一不至於其耳、則耳無聰、因而其耳不至於其心、則其心不靈。人之喜人詩文而自爲誦者、爲己也。轉以誦於人者、爲人也。人之爲己而自爲誦者難矣、矧爲人誦乎。故曰、仲言終其身寄於所不可必者也。寄於所不可必、其勢宜不能多且久。然能使人之爲仲言誦多且久於其自爲誦、數十年中如一日、如一人者、仲言之誠所爲也。夫其審聽而哀問者、誠也。吁。爲仲言者、亦極難矣。凡得之難、則守之堅。得之難、守之堅、則其口耳出入之際、雖欲加擇焉、而非惟不暇、且不敢。欲加擇焉而有所不暇且不敢、故能積。是仲言所以該且核之故也。

同郷の楊修齡の話。「華亭の唐汝詢（字は仲言）は、五歳で失明し、今は五十余歳。音読で學問を修めた。詩文を創作し、古の詩文に注釈數十萬言を施した。その注釈は汎汎な文獻を用い、かつ的確である。だが、同音字の区別はあまりできない」と。私はこれを聞き、奇才だと思つた。

二年後、偶然白門で唐汝詢と出逢つたが、果たして楊修齡の言う通りの人だつた。数ヶ月後に再会した際、私の詩の一節を諳んじた。私が、その詩全部を朗詠すると、しみじみと長い間憐憫の情に浸りながら沈黙した。彼は、詩文を味わうために、数十年の間、全身全霊を傾けてきたのだ。彼のような方法を極めるのはとても難しい。彼は脇目もふらず、ひたすら古典を暗記し続けた。これこそ彼が豊富な知識を蓄積し、仔細な文章を書くことが出来る原因である。

（鍾惺「贈唐仲言序」『隱秀軒集』卷十九）<sup>②</sup>

余纂有「十異人傳」、仲言唐君其一也。君五歲喪明、猶未受教師句讀、問之八方五色不復省記、若聲音點畫種種文字、懵如也。稍長、堅坐無所事事、輒以耳受書。從旁覆讀一二番、旋即記憶。久之、貫串經史、諸子百家及稗官言而最喜作詩。有「編蓬」、「姑蔑」等集行於世、多爲通人所賞。前太守周翰許公、延見賜粟帛。龔使修齡楊公、旌其廬曰「耳學淹通」、又捐俸爲君刻「唐詩解」。而陳子有問卿、張叔翹參知諸君爭資助之。

其詩計五十卷、大約取高廷禮正聲、及李于鱗選、而精益求精、精汰諸箋、附以己意。典而覈、裁而文、既不掙擊古人、而又鮮遷就附和之弊。世人不解詩、遂不解奇君。即奇君者、不奇其博而奇其目。嗟呼。此未易與俗人論也。經云、天去地八万四千里。吾曹仰天而見日月、則目有八万四千里之分量。若無日月、又無燈光、目雖具、悉與仲言等。然世人但能以三光見、而仲言又能以不見見者也。其箋註無所不採擇、不握管而筆端有眼、不具相而通身是眼、不謬衡鑒不依光明、而法眼天眼千手眼皆備矣。今人六根具足、授以此詩、不諦句讀、或以上着下、或以下着上、首尾顛倒、莫知指歸。間有因文解義、略涉音聲者、非螢火借光、則眼中着木柀子相似、試與仲言說詩、吾未知其明暗果安在也。古之異人、廢心而用形。今之異人、廢形而用心。余向聞新安詩人有汪大、呂頌、又得仲言唐君。覺上帝之五官無權、而倉頡之六書可廢、異哉、有目者得此詩而讀之、將無愧死也夫。

私の編纂した「十異人伝」の中に唐汝詢伝がある。彼は五歳で失明するまで句読の経験がない。やや成長したのち、父兄が一、二回音読してやるとすぐに暗唱した。その後、經史、諸子百家、稗官の小説を学び、好んで詩を創作した。詩集「編蓬」、「姑蔑」等が編まれ流行した。太守の許周翰は粟帛を与え、龔使の楊修齡は扁額と「唐詩解」の出版費用を授けた。また、太僕寺卿の陳子有と參知の張叔翹なども経済的に支援した。

『唐詩解』は五十卷、高棟『唐詩正声』と李攀龍の『唐詩選』をもとに増補した。各種の注釈を丹念に取捨選択して、自らの意見を付した。彼は、視覚に頼らず、物事の本質を見抜く能力を備えていた。今人は、六感を備えていても、詩を正しく読めていないのだから、まことに恥じ入るばかりだ。

(陳繼儒「唐詩解序」『唐詩解』序卷)

唐汝詢とその『唐詩解』について

唐仲言、名汝詢、華亭人、世業儒。仲言生、五歲而瞽。未瞽時、聰穎絕倫、方在乳保、卽能識字、讀『孝經』成誦。及瞽、但默坐、聽諸兄咕嗶而暗識之、積久遂淹貫。婚冠既畢、年方盛壯、益令昆弟輩、取六經子史以及稗官野乘、皆以耳授。顛末原委、默自詮次、純類瑕瑜、剖別精核。蓋從章句之粗、以冥搜微渺、心畫心通、罔有遺墮矣。於是遂善屬文、尤工於詩。海內人士、踵門造謁。仲言每一晉接、歷久不忘。與之商榷今古、超邁諧暢、繼以篇什、語新韻協、千言百首、成之俄頃。而音吐鏗然、使聽者忘疲。子侄門徒輩、從旁抄錄、一字亥豕、輒自覺察、不可欺也。間亦出遊、凡中原吳楚之區、山川里道、亦能記憶、爲客述之。

予嘗邂逅之於金陵、見仲言、貌甚寢而心極靈、雖十有目者、不能一當其瞽、異而敬禮焉。再讀其『唐詩解』、其所掇入古文以爲箋註者、自習見以及秘異。溯流從源、搜羅略盡。然必先經後史、不少紊淆。雖詩賦之屬、所援引亦從年代次序之。如某字某句、秦漢並用、則必博采秦人、不以漢先。詳贍致精、有若此也。所註有『編蓬集』、『姑篾集』及『唐詩解』共若干卷、行於世。然其造就未有已也。當予晤言、時爲萬曆戊午、仲言年四十餘矣。

唐汝詢は、代々儒学をなりわいとする家に生まれた。幼少より聡明で、乳離れする前から字を理解し、『孝經』を暗唱した。失明後、兄弟の朗読を聴いて暗唱した。結婚後も兄弟に六經子史や小説を読ませ、内容を記憶した。数多くの客が唐汝詢を訪ねた。彼は一度客人と会えば、長い時間が経っても忘れない。討論すれば、さまざまな文献を引用し見事に自分の見解を述べた。詩は、斬新で韻律も整い、短時間で大量の詩歌を作り、これを甥や弟子が抄録した。中原と吳楚などの地域にも旅し、その山川や道路もきちんと記憶した。

私は、万曆四十六年（一六一八）、金陵で唐汝詢と会った。彼は四十数歳だった。容貌は良くないが、非常に賢く、健常者も誰一人彼に敵わない。その『唐詩解』の箋注は、まず經書を引用し、次いで史書を用いる。また年代の古い詩文を優先する。詩集『編蓬集』、『姑篾集』と『唐詩解』は数度刊行されたが、なお修正を続けている。

（陳衍「唐仲言李公起伝」、『明文海』卷四十四<sup>④</sup>）

唐瞽者汝詢、字仲言、雲間人。五歲而瞽、父兄抱膝上、授以三百篇、及唐詩、無不成誦。旁通經史、能爲諸

体詩。箋註唐詩、援據該博、亦近代一異人也。嘗過余山中、酒間誦子虛、上林諸賦、杜、白諸長篇、鏘金戛玉、瑯瑯不遺一字。留校杜詩、時有新意、如解「溝壑疏放」句、云出於向秀賦「稽誌遠而疏、呂心曠而放」、亦前人所未及也。仲言之兄汝諤、篤嗜王李之學、仲言童而習之、故於其詩、未能超詣、蓋亦雲間流派如此。

唐汝詢は、五歳で失明した。その後、父兄が膝の上に抱き『詩経』と唐詩を読み聴かせ、これを暗唱した。経書と史書を読破し、様々な体裁の詩を作ることができた。該博な情報を援用して唐詩に箋註した彼は、近代の異人だ。嘗て私を訪ねた時、酒席で「子虚賦」や「上林賦」、杜甫と白居易の長篇を朗々と美しい声で誦した。また、杜甫の詩を校勘して新たな見解を見出した。例えば「溝壑疏放す」の出所は、向秀の賦の「稽、志遠くして疏、呂、心曠くして放なり」の一句だと言った。兄の汝諤は、李攀龍と王世貞の學說に傾倒していたので、唐汝詢もこれに倣い雲間流派に属する。

（錢謙益「唐瞽者汝詢小伝」、《列朝詩集小伝》、《丁集中卷》<sup>5)</sup>

なお、従来より知られていた周亮工による伝記は次のとおりである。

唐仲言、名汝詢、華亭人。世業儒。仲言五歳而瞽。未瞽即能識字、讀「孝經」成誦。乃瞽、但默坐、聽諸兄咕嗶而暗識之、積久遂淹貫。婚冠既畢、益令昆弟輩、取六經子史以及稗官野乘、皆以耳授。顛末原委、默自詮次。純類瑜瑕、剖別精核。蓋從章句之粗、以冥搜微妙、心畫心通、罔有遺墮矣。於是遂善屬文、尤工於詩。海內之士、踵門造謁。仲言每一晉接、歷久不忘。與之商榷古今、繼以篇什。千言百首、成之俄頃。而音吐鏗然、使聽者忘疲。子侄門徒輩、從旁抄錄、一字亥豕、輒自覺察、不可欺也。貌甚寢而心極靈、嘗解唐詩。其所掇拾古文以爲箋註者、自習見以及秘異、溯流從源、搜羅略盡。然必先經後史、不少紊淆。雖詩賦之属、所援引亦從年代次序之。如某字某句、秦漢並用、則必博采秦人、不以漢先。詳瞻致精、有若此也。所著「編蓬集」、「姑蔑集」及「唐詩解」共若干卷、行於世。錢虞山云、唐較杜詩、時有新義。如解「溝壑疏放」句、云出於向秀賦「稽誌遠而疏、呂心放而曠」、亦前人所未及也。

（周亮工「唐汝詢伝」、《書影》卷三）<sup>6)</sup>

唐汝詢とその『唐詩解』について

以上の諸資料によると、唐汝詢は、五歳で両眼の光を失った。陳衍の「唐汝詢伝」は「乳児のころ既に字を覚え、『孝経』を読んで暗唱することができた」とした。一方、陳繼儒の「唐詩解序」は「五歳以前句読を習ったこともなく、失明のため、方位、色などもわからない様子だ」と記しており、多少の相違がある。ただ陳繼儒、陳衍、錢謙益とも、唐汝詢と直接接触しており、唐汝詢の驚異的な記憶力が幼いころから備わっていたことは間違いないだろう。

また、これらの資料によつて、周亮工『書影』所収の「唐汝詢伝」は、陳衍「唐仲言李公起伝」と錢謙益『列朝詩集』を参照して書かれたことが判明した。

## 二、唐汝詢の生卒年について

前述の五文獻は、唐汝詢の記憶力や才能について詳しく記述しているが、全て生卒年についての言及がない。近年、雷恩海氏は陳衍「唐仲言李公起伝」の「當予晤言、時爲萬曆戊午、仲言年四十餘矣」に基づき、生年は一五七三年前後、没年は未詳である、と主張した。<sup>(7)</sup>

あらためて、筆者が唐汝詢自身の著作を精査した結果、生年は一五六四年、没年は一六五九年であると推定した。以下にその根拠を示したい。

まず、生年であるが、唐汝詢の自作詩集『西陽山人編蓬集後集』に明白な記載を見出した。

辛亥歲、余春秋四十有七、季春廿四日乃生朝也。作客彌年、骨肉星散。追亡念存、涕泗橫集。少喜子美七歌、故嘗擬之矣。

辛亥の歲、私は四十七歳になり、三月二十四日が誕生日だ。長年他郷を漂泊し、親族と離散した。亡き人を追悼し、存命の人を懐かしく思い、万斛の涙を注いだ。幼い頃から杜甫の「同谷七歌」が好きで、これを真似て「鍾陵七歌」を作った。

(唐汝詢「鍾陵七歌序」、『西陽山人編蓬集後集』卷三)<sup>(8)</sup>

愚拙敢言知命始、飄零只自惜顏催。封丘五十詩名就、老去蓬心未忍灰。

愚生は「知命」の年が始まったと口に出し、落ちぶれて、ただ自ら老けて行くことを惜しむ。高適は五十歳の時「封丘」詩で名をなした。老いても蓬心に埃だらけになるのはまだ忍びない。

(唐汝詢「甲寅元日試加筆」『酉陽山人編蓬集後集』卷九)<sup>9)</sup>

辛亥歳は、万曆三十九年(一六一一)であり、甲寅年は、万曆四十二年(一六一四)である。一六一一年に四十歳となり、一六一四年に五十歳である。ここから逆算すると、生年は、嘉靖四十四年(一五六四)になる。ここで、明代の人は、「虚歳」(数え年)で年齢を計算していたことに留意し、さらに検討したい。

穆宗隆慶六年壬申四月廿八日午時生母臨産之。前一夕祖母望見室内有火光。

神宗萬曆元年癸酉二歳。

二年甲戌三歳。

穆宗隆慶六年(一五七二)四月二十八日の昼時、母は私を産んだ。前夜、祖母は室内に火の光を見た。

神宗万曆元年(一五七三)二歳になった。

(周起元「海澄周忠惠公自敘年譜」)<sup>10)</sup>

萬曆三年乙亥一歳。腹痛起、壁棟間火光熒熒、先孺以爲鬼燒、疑不祿。而火光緣棟上升至脊梁正中、而予生。

万曆三年(一五七五)、一歳。陣痛が起こり、母は壁と屋根の間に火の光を見て鬼火だと思ひ、不吉だと疑った。火の光は棟に沿って広がり、梁の真ん中まで達した時に私は生まれた。

(魏大中「嘉善魏大中自譜」)<sup>11)</sup>

周起元と魏大中は、唐汝詢と同時期の人で、出身地も近い。彼らは、自ら年譜で生まれ年を一歳と書いている。

唐汝詢とその『唐詩解』について

故に、万曆三十九年に唐汝詢は四十七歳と述べているが、実際は満四十六歳と考えられる。以上に基づき、あらためて、さきにあげた二詩をもとに試算すると、唐汝詢の生年は、嘉靖四十五年（一五六五）だと判断できる。

次に、卒年であるが、唐汝詢自身の明白な記述はないものの、彼の著作『西陽舌瑣』を考察することにより、推定が可能である。

『西陽舌瑣』は、唐汝詢晩年の雑記で、回想と日常雑記が収録されている。この中に、時期を明記するものが数箇所ある。その最も遅いものが「徐観蘭作烏程県志」である。

余之交公在崇禎己巳間、公年已八十有四。今歲丙子、遇府學教授俞公、道公矍鑠如故、蓋九十一矣。

私と徐さんの出会いは崇禎二年（一六二九）で、当時徐さんは既に八十四歳だった。今年（崇禎九年（一六三六））で、府学教授の俞さんと会った。ところ、俞さんは、徐さんが今も元気で、九十一歳だと教えてくれた。

（「徐観蘭作烏程県志」『西陽舌瑣』<sup>12</sup>）

「今歲丙子」とは、崇禎九年（一六三六）である。ここから、少なくともこの年まで、唐汝詢が健在であったことが分かる。

このほか、『西陽舌瑣』の序を書いた呉恬立も、唐汝詢の没年について次のように言及している。

每翻閱先生遺文及先人寄憶之什、不勝留連。今年歲己酉、余館於浙之新倉、距先生逝世時十年矣。

唐汝詢先生の遺文や先人の思いを託したものに目を通すたびに、留連に堪えない。今年（己酉の年）で、私は浙江の新倉に寄寓している。先生が逝去されてもう十年が経つ。

（呉恬立「西陽舌瑣序」<sup>13</sup>）

「今年歲己酉」とは、康熙八年（一六六九）である。「距先生逝時十年矣」との文言から逆算すると、唐汝詢は順

治十六年（一六五九）に没したことになる。管見の限り、これらのほかに唐汝詢の卒年に関する資料は見当たらない。そこで、ひとまず、卒年は順治十六年（一六五九）だと推定したい。<sup>(14)</sup>以上を要するに、唐汝詢は九十四年間を生きた。当時であつてはかなりの長寿であつた。

### 三、『唐詩解』の出版について

唐汝詢は両眼の光を失つたとはいえ、父兄の口から書物を聞いて理解し、甥と弟子の手を借りて学説を書き留め、大量の著作を残した。彼は自ら詩文集で著書について以下のように述べた。

不肖詢、雲間廢人也。目不見日月者五十年。雖苦志殺青、垂老不怠、而借人口吻、該博未能、以故不能多有撰述。就燥發所聞、作『唐詩解』五十卷及『海上』、『姑蔑』、『編蓬』三集而已。他若『藝圃雕龍』、『今代樂府』、有稿而未竟也。

不肖詢は、雲間の廢人である。目が見えず五十年を過ごした。著作の完成に苦心し、老衰の身になつても怠らない。しかし、他人の口を借りて、物事に広く通じてもないし、著わしたのものも少ない。少年期に聞いたことに基づき、『唐詩解』五十卷、『海上』、『姑蔑』、『編蓬』の三集を書いたにすぎない。ほかに『藝圃雕龍』、『今代樂府』の原稿があるが、完成していない。

〔答王幼中〕『西陽山人編蓬集後集』卷十三<sup>(15)</sup>

未完成の『藝圃雕龍』と『今代樂府』は、もはや考証できないが、この記述によると、『唐詩解』のほかに、『海上』、『姑蔑』、『編蓬』という詩文集名が確認できる。『海上』と『姑蔑』は現存しないが、自作の序、賦、古今体詩などを収録した『西陽山人編蓬集』十巻と続作の『西陽山人編蓬集後集』十五巻は、現存している。

しかし、唐汝詢本人にとつても、後世への影響においても、最も重要な著作は、やはり『唐詩解』だと考えられる。『唐詩解』の出版がなければ、唐汝詢も当時の文壇で注目されることはなかつただろう。『唐詩解』の上梓は、

唐汝詢とその『唐詩解』について

実は奇跡のような偶然であった。呉昌祺は『刪訂唐詩解』の例言で、出版の経緯を詳しく紹介している。

先生五世從孫克紹惠臣謂予曰、此書苦心二十年未能授梓、時郡城火、酉陽公令人舁巨篋置衢中、踞而号。郡伯某公詢而異之、詰旦、延入署、問以古詩枯桑海水二句、公舉李注對、更問數條、應答如響。郡伯大喜、佐鳩工焉、而不詳郡伯姓氏。予憶先嚴嘗言酉陽先生與太守許公相契、而看先生序中亦及許公周翰、必其人也。

唐汝詢先生の五代目の孫唐克紹の字は惠臣という。彼は私に「この本は二十年かけて苦心しても出版できなかった。その頃、市中で火災が発生した。唐汝詢は、原稿を取めた大きな箱を運ばせ、火事の現場から離れ、街角に座り込んで号泣した。当時の松江の郡伯はその様子を見て、唐汝詢に状況を尋ねて府庁に招き、唐詩について討論した。古詩の「枯桑知天風、海水知天寒」の一句について聞くと、唐汝詢は李善の注を引用して答え、ほかの質問もよどみなく応答した。郡伯は大喜びで、『唐詩解』の刊行を補助してくれた。しかし、その郡伯の姓名はわからない。」と言った。私は、唐汝詢先生が当時の松江知府の許維新が友人である、と亡父から聞いたことを思い出した。先生の序文にも許周翰さんへの言及があるから、必ずこの人だろう。

(呉昌祺「刪訂唐詩解・例言」)

火災によって有名になった唐汝詢は、当時の官僚と文人に才能を認められた。特殊な境遇と卓越した成果は、人々の感動と驚嘆を呼んだ。それによって各方面から援助を受け、『唐詩解』を出版することが出来、後世に伝わることになった。

また、陳継儒の「唐詩解序」には、援助者に関する記述がある。

太守周翰許公、延見賜粟帛。塩使者修齡楊公、旌其廬曰「耳學淹通」、又捐俸爲君刻『唐詩解』。而陳子有罔卿、張叔翹參知、諸君爭資助之。

(陳継儒「唐詩解序」、『唐詩解』)

これらの支援者は、史書などにより、それぞれの事績を確認できる。

「太守周翰許公」は、先述の松江知府許維新である。許維新（一五五一～一六二八）、字は周翰、号は繩齋、山東堂県（山東省聊城市）の人。万曆十七年（一五八九）の進士。山西沢州知州、刑部清吏司員外郎、戸部清吏司郎中、浙江松江府知府、山西按察使司按察史、光祿寺少卿、戸部侍郎を歴任した。没後、都察院右都御史に誥封された。『河東兵事略』、『郡邑談』など若干巻の著作がある。<sup>(17)</sup>

「修齡楊公」は、楊鶴である。楊鶴、字は修齡、湖広武陵（湖南省常德市）の人、万曆三十二年（一六〇四）の進士。初め洛南知県に務め、万曆四十年（一六一二）御史に拔擢された。崇禎元年（一六二八年）左僉都禦史に昇進し、その後、兵部尚書、太子少保を歴任した。<sup>(18)</sup>

「陳子有問卿」は、陳所蘊である。陳所蘊、字は子有、松江府上海県（上海市）の人。万曆十七年（一五八九）の進士。万曆二十三年（一五九五）湖広右参議兼僉事に昇進し、その後、河南副使、南京太僕寺少卿を歴任した。『竹素堂藏稿』を著した。<sup>(19)</sup>

「張叔翹參知」は、張所望である。張所望、字は叔翹、松江府華亭（上海市）の人。万曆二十九年（一六〇一）の進士。衢州知府、広西副使、左江参政などの職を務めた。『閱耕録』、『帰田録』、『龍華里志』などの著作がある。<sup>(20)</sup>

#### 四、終わりに

以上の考察により、唐汝詢の生年は嘉靖四十五年（一五六五）で、卒年は順治十六年（一六五九）であることを推定するとともに、五つの伝記資料によりその生涯に関する事跡を究明した。唐汝詢は、自ら「雲間廢人」、「山人」と称した。実のところ詩人であると同時に、優れた学者でもあった。唐汝詢の自述と諸書の記録によると、幼いころから強い才能を發揮し、記憶力抜群で、広く種々の学問に通じた人であった。また、『唐詩解』は、偶然の火事で世間に知られることとなり、それを契機に各方面から援助を受け、上梓が叶ったことも明らかになった。

唐汝詢の置かれた時代は、王朝の交代に伴い、文学の各流派も盛んであった。江南地区では錢謙益を代表とする

唐汝詢とその『唐詩解』について

虞山詩派、呉偉業を代表とする婁東派、さらに陳子龍を代表とする雲間派という三つの詩歌の流派が活躍していた。唐汝詢もその潮流に追隨し、詩文の創作や研究にたゆまぬ努力を続け、生涯を通じて著作に専念した。盲人学者という特殊な存在だけでなく、その著述と學問に対する姿勢は、当時の文人として十分注目すべき一人である。

注

- (1) 王振漢校『唐詩解』（河北大学出版社、二〇〇一年）代前言一頁参照。原文は「有關唐汝詢生平事跡、書影所載為惟一詳賅資料、其他零散所記、實發軔於此、輾轉相抄而已。」
- (2) 鍾惺『隱秀軒集』（上海古籍出版社、一九九二年）一三一頁参照。
- (3) 唐汝詢『唐詩解』（九州大学所蔵）参照。
- (4) 黄宗羲編『明文海』（中華書局、一九八七年）卷四十四参照。
- (5) 錢謙益『列朝詩集小伝』（上海古籍出版社、一九八三年）五二七頁参照。
- (6) 周亮工『書影』（上海古籍出版社、一九八一年）八三頁参照。
- (7) 雷恩海『唐汝詢生平考述暨著作鈎沈』（『蘭州大学学报（社会科学版）』二〇一一年）二五〇～二五三頁参照。
- (8) 唐汝詢『酉陽山人編蓬集後集』（内閣文庫所蔵）卷三参照。
- (9) 唐汝詢『酉陽山人編蓬集後集』（内閣文庫所蔵）卷九参照。
- (10) 于浩輯『明代名人年譜（九）』（北京図書館出版社、二〇〇六年）四〇一頁参照。周起元（一五七一～一六二六年）、字は仲先、号は綿貞、福建海澄人（今福建省龍海市）。
- (11) 于浩輯『明代名人年譜（九）』（北京図書館出版社、二〇〇六年）四六三頁参照。魏大中（一五七三～一六二五年）、字は孔時、号は廓園、浙江嘉興府嘉善縣人（今浙江省嘉興市）。
- (12) 唐汝詢『酉陽舌瑣』（早稲田大学図書館所蔵）参照。
- (13) 唐汝詢『酉陽舌瑣』（早稲田大学図書館所蔵）参照。

- (14) 澤田瑞穂「盲詩人唐汝詢生卒考」(早稲田大学『中国詩文論叢』第一号、一九八二年)も参照。なお、本論文は竹村則行先生よりご教示頂いた。朱福生「唐汝詢生卒年考」(『滁州学院学報』第十五卷第四期、二〇一三年)も参照。なお、本論文は岩崎華奈子先生よりご教示頂いた。
- (15) 唐汝詢『酉陽山人編蓬集後集』(内閣文庫所蔵) 卷十三参照。
- (16) 吳昌祺『刪訂唐詩解』(上海古籍出版社、『統修四庫全書』・一六一二・集部) 五頁参照。
- (17) 『嘉靖山東通志』(上海書店、一九九〇年) 卷二十八参照。
- (18) 『明史』(中華書局、一九七四年) 卷二百六十参照。
- (19) 『明神宗実録』(台北中央研究院歴史語言研究所、一九六六年) 卷三百二十二及び卷五百十八参照。『尚書』「冏命序」に、「穆王命伯冏為周太僕正」とあり、後世「太僕寺卿」という官職を「冏卿」とも呼ぶようになった。当時、陳所蘊は南京太僕寺少卿を務めていたため、「冏卿」と呼ばれた。
- (20) 『上海県志』(早稲田大学図書館所蔵) 卷九及び卷十参照。